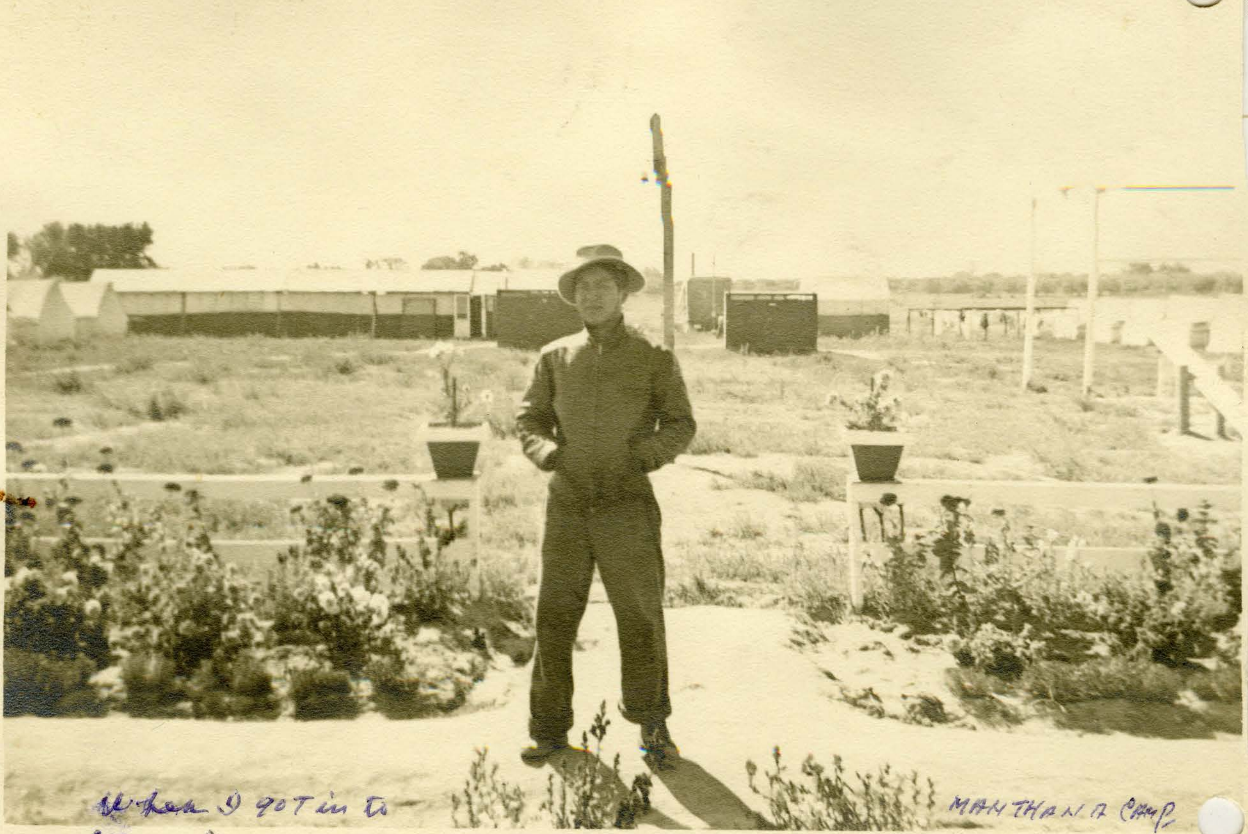

When I got in to MANTHANA Camp

(20才) マンザナ収容所に入所した時の直京ごろーさん(20才)です。知人も無く、とっても淋しかったです。

マンザナ収容所へ行く時は、故佐々木さんが、メリノール学校へ連れて行ってくれた。アラメダ近りのバンダル日語学園、出生証明書をポケットへ入れた、スーツケースに必要荷物を入れたと記憶している。日米戦争が始まったので、メリノール学校から、ユニオンステーションへ連行された。汽車に乗せられて何時間、ゆられた事であろう。キャンプ行きとなった。途中で、大きな箱をもらった。沢山の昼食があった。オレンジもあった。マンザナ収容所へ到着した。M.Pがいた。列の中で待った。私は順番を待った。二枚のブランケットをもらった。案内役から指名された部屋へ入った。18名が入れた。五、六名は帰米二世であった。知合いとしてなって、指名された。カトレベッドの上に荷物を置いた。初日は大風のため、窓ガラスのない部屋だったので、砂ぼこりが沢山のって来た。ゴミを外へハキステタ。外には、見知らぬ青年が誰かと話していた。今から思うと兄と、清永ドクターも、マンザナ収容所にいた事を知った。外出して、ドクターの学校への学んだのは後日となって判明した。

部屋の中は、帰米二世ばかりで、英語ではなく、メリノールの学校へ行った若者達であった事を知った。大変苦しと思って、メリスビル地方から来た人だったらしい。英語が達者であったので、足行ショーが行なわれた時「貫一とお宮」のお芝居をやった事をおぼえている。私はお宮さんになり、(カンイチ オミヤ) 貫一さんは[illegible]さんは貫一になって、大変面白いショーだったので、皆さんからオホメの言葉をいただいた。毎日、次の日の方にトラックに乗って、大きな10×10の大穴を掘りつづけた。ゴミ捨てる場所であった。あるか月かで「砂糖大根のシーズン」作業に行った。「一時間一ドルだった」行先はアイダホ[illegible]。